

# Glocal Tenri



月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.2 February 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

2

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
「教学と現代」開催に寄せて  
／高見宇造 ..... 1
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (37)  
動物たちの“同定”の経緯 ①  
／佐藤孝則 ..... 2
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (26)  
太平洋戦争と北米伝道④ 抑留所での活動  
／尾上貴行 ..... 3
- ・ 伝道と翻訳 一受容と変容の“はざま”で—(15)  
初期仏教に見る「ことば」の諸相④  
／成田道広 ..... 4
- ・ 日本語教育と海外伝道 (7)  
国内での日本語教育と海外での日本語教育②  
／大内泰夫 ..... 5
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (5)  
キルケゴールは自分のために読め—そして  
キルケゴールと対話をせよ  
／金子 昭 ..... 6
- ・ コロンビアへの扉 —ラテンアメリカの価値観と教への伝播— (2)  
1. ラテンアメリカ基礎知識の話  
／清水直太郎 ..... 7
- ・ 天理参考館から (16)  
平成最後の亥年にまつわる資料から  
／幡鎌真理 ..... 8
- ・ ヴァチカン便り (36)  
中国と暫定合意  
／山口英雄 ..... 9
- ・ English Summary ..... 10
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 11  
第 317 回研究報告会 (森洋明) / 第 318 回研究報告会 (高見宇造) / 平成 30 年度「教学と現代」のご案内 / 平成 31 年度公開教学講座のご案内

## 巻頭言

### 「教学と現代」開催に寄せて

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

来る 2 月 26 日、研究所では恒例の「教学と現代」を開催する。テーマは最終面に掲載したように、「天理教のすべてが分かる事典を目指して—『天理教事典 第三版』刊行によせて—」(以下、『事典』)である。昨年、3 月 26 日に刊行した『事典』は、お陰様で多くの教内外の皆様にご利用をいただいている。『事典』をテーマにするのかと訝かる方がおられるかも知れない。しかし編集に当たった者として、それは充分取り上げるに値すると考えている。

利用者からの一番の声は、「今まで事典は引くものだと思っていたが、この事典は精読すべきものだと感じる」というものである。「私は何頁まで読みました」と逐一知らせて下さる方もいる。それは主に「天理教学を学びたい」という青年層の信者の方からである。今そうした機運が教内に湧き起こっていることを感じる。もちろん「天理教学」と言っても、「原典学(おふでさき、みかぐらうた、おさしづ)」、「歴史的教学 (1 教祖伝・2 伝承学・3 つとめ・4 天理教史・5 人物伝)」、「理論的教学 (1 教義学・2 信条学・3 倫理学)」、「実践的教学 (1 教会学・2 伝道学・3 伝道補助学)」、「天理教学研究」(610 頁)の項を一読願いたい。『事典』ではその一つひとつを可能な限り取り上げている。

また反響は壮年層の教会長からも多い。これは、すでに『初版』『改訂版』を利用下さる方で、「今回の『第三版』は特に利用する者への配慮が行き届いている」という声である。実は今回、可能な限り記述の統一を図り、文体や筆致を揃えた。そのため所員は幾度も原稿を推敲する労を惜しまずに勤めてくれた。そうしたこともあって苦情の類いはほとんど聞かせていただかない。

私自身も「第三版刊行に際して」に記したが、「事典の編纂は収録項目の選定に

始まります。今回も所内で幾度も時間をかけ検討を重ねましたが、その項目の意味するところを何よりも限られた文字数で、しかも過不足なく誤りなく表現することは至難のわざであると申しても過言ではありません。これがおやさと研究所に事典編纂作業を委ねられたゆえんである」との思いは一層堅くなっている。

研究所では刊行後、直ちに「天理教事典研究会」を立ち上げ、再び『事典』の「あ」行から所員、全員で精査する取り組みを始めた。それは『第三版』に誤植、誤記はなかったかということではない。今回の「教学と現代」開催趣旨に記したように、より一層「完璧」を目指したいという研究所としての不断の思いの現れである。所内で活発な議論が沸騰していることを当日は是非、皆様にお伝えしたく思っている。

ところで、これは『事典』が果たした役割というものだろう。特に教外の天理教研究者からの「天理教教祖はシャーマンである」とか「天理教は多神教である」という誤解は、ほぼ一掃されたのではないだろうか。『事典』の「啓示」(313 頁)では、「親神が人間の自然的経験や認識を超えた形において自ら自己を顕し示されること。したがって、啓示の歴史的実現に当たっては、いわば、絶対なるものが相対の場にあらわとなり、永遠が時間の中に現成することになる」と表現してあるが、研究所としてもさらに襟を正して取り組みたいと考えている。

「おさしづ」には、「一言の理は万言の理に当る」(30・2・1)とも「一言説いたら、百巻の書物に出来る」(33・9・9)とも言われる。それが親神の言葉というものであろう。私はこの「おさしづ」は「事典」を編纂する者の大切な心得だと考えている。今回の「教学と現代」では是非、活発な意見交換をさせていただきたく、皆様の御来場をお待ちしている。